

四谷怪談

田中貢太郎



四谷怪談

田中貢太郎



四谷怪談

田中貢太郎

げんろく

元禄年間のことであつた。四谷左門殿町に

おさきてぐみ

御先手組の同心を勤めている田宮又左衛門と云う者

たみやまたざえもん

ふだん

が住んでいた。その又左衛門は平生眼が悪くて勤め

むすめ

に不自由をするところから女のお岩に婿養子をして

いわ

ほうそう

かか

隠居したいと思つていると、そのお岩は疱瘡に罹つ

む

て顔は皮が剥けて渋紙を張つたようになり、右の眼

に星が出来、髪も縮れて醜い女となつた。

それはお岩が二十一の春のことであつた。又左衛

ひど

門夫婦は酷くそれを気にしていたが、そのうちに又

左衛門は病氣になつて歿なくなつた。そこで

あきやまちょうえもん
秋山長右衛門、こんどうろくろべえ近藤六郎兵衛など云う又左衛門の朋
輩が相談して、お岩に婿養子をして又左衛門の跡目
を相続させようとしたが、なにしろお岩が右の姿で
あるから養子になろうと云う者がない。皆が困つて
いると、したや下谷のかなすぎ金杉にこまたぐり小股潜のまたいち又市と云う口才のあ
る男があつて、それを知っている者があつたので呼
んで相談した。又市は、

「これは、ちと面倒だが、お礼をふんばつしてくだ
されるなら、きつと見つけて来ます」

と、云つて歸つて往つたが、間もなく良い養子を

見つけたと云つて来た。それは伊右衛門いえもんと云う摂州せつしゅうの浪人であつた。伊右衛門は又市の口に乗せられて、それでは先ず邸やしきも見、母親になる人にも逢あつてみようと云つて、又市に跟ついてお岩の家へ来た。

伊右衛門は美男でその時が三十一であつた。お岩の家ではお岩の母親が出て挨拶あいさつしたがお岩は顔を見せなかつた。伊右衛門は不思議に思つてそつと又市に、

「どうしたのでしょうか」

と云うと、又市は、

「あいにく病気だと云うのですよ、でも大丈夫ですよ、すこし容貌きりようはよくないが、縫物が上手で、手も旨いし、人柄は至極柔和だし」

と云った。伊右衛門は女房は子孫のために娶めとるもので、妾めかけとして遊ぶものでないから、それほど吟味をするにも及ばないと思った。この瘦浪人やせろうにんは一刻も早く三十俵二人扶持ぶちの地位みぢんになりたかったのであつた。

双方の話は直ぐ纏まとまった。伊右衛門は手先が器用で大工が出来るので、それを云い立てにして御先手

組頭三宅弥次兵衛みやけやじべえを経て跡目相続を望み出、その年の八月十四日に婚礼することになり、同心の株代としてお岩の家へ納める家代金十五両を持って又市に伴つれられ、その日の夕方にお岩の家へ移つて来た。

お岩の家では大勢の者が出入して、婚礼の準備を調べていたので、伊右衛門は直ぐその席に通された。そして、その一方では近藤六郎兵衛の女房がお岩を介錯かいしゃくして出て来たが、明るい方を背にするようにして坐らしたうえに、顔も斜に向けさしてあつた。伊右衛門は又市の詞ことばによつてお岩は不容貌ぶきりような女である

とは思っていたが、それでもどんな女だろうと思つて怖いような気もちで覗のぞいてみた。それは妖怪ばけもののような二た目と見られない醜い顔の女であつた。伊右衛門ははつと驚いたが、厭いやと云えば折角の幸運をとり逃がすことになるので、能よいことに二つは無いと諦めてそのまま式をすましてしまった。

いよいよお岩の婿養子になつた伊右衛門は、男は好いし器用で万事に気の注つく質たちであつたから、母親の喜ぶのは元よりのこと、別けてお岩は伊右衛門を大事にした。しかし、伊右衛門は悪女からこうして

愛せられることは苦しかった。苦しいと云うよりは寧ろあさましかつた。それもその当座は三十俵二人扶持に有りついたらと云う満足のためにそれ程にも思わなかつたが、一年あまりでお岩の母親が歿くなつて他に頭を押える者がなくなつて来ると、悪女を嫌う嫌厭けんおの情が燃えあがつた。

その時御先手組の与力に伊藤喜兵衛と云う者があつた。悪竦あくくちつな男で仲間をおとしいれたり賄賂わいろを執つたりするので酷く皆から嫌われていたが、腕があるのでだれもこれをどうすることもできなかつ

た。その喜兵衛は本妻を娶らずに二人の壮わかい妾を置いていたが、その妾の一人のお花はなと云うのが妊娠した。喜兵衛は五十を過ぎていた。喜兵衛は年とつて小供を育てるのも面倒だから、だれかに妾をくれてやろうと思いだしたが、他へやるには数多金たくさんをつけてやらなくてはいけないから、だれか金の入らない者はないかと考えた結局あげく、時どき己じぶんの家へ呼んで仕事をさしている伊右衛門が、容貌の悪い女房を嫌っていることを思いだしたので、伊右衛門を呼んで酒を出しながらそのことを話した。

「お前が引受けてくれないか、そのかわり一生お前の面倒を見てやるが」

伊右衛門はその女に執着を持っていたから喜んだ。

「あの妖怪ばけものと、どうして手を切ったら宣よいのでしよう」

「それは、わけはないさ」

喜兵衛は伊右衛門に一つの方法を教えた。伊右衛門はそれを教わってから家を外きものにして出歩いた。そして、手あたり次第に衣服や道具を持ち出したので

すぐ内証ないしよが困つて来た。お岩がしかたなしに一人置いてあつた婢げじよを出したので、伊右衛門の帰らない晩は一人で夜を明さなければならなかつた。お岩は伊右衛門を恨むようになった。

その時喜兵衛の家からお岩の許もとへ使が来て、すこし逢いたいことがあるから夜になつて来てくれと云つた。お岩は夕方になつても伊右衛門が帰らないので、家を閉めておいて喜兵衛の家へ往つた。喜兵衛はすぐ出迎えて座敷へあげた。

「あなたをお呼びしたのは、伊右衛門殿のことだが、

あれは見かけによらない道楽者で、博奕ばくち打ちの仲間へ入つて、博奕は打つ、赤坂あかさかの勘兵衛長屋の比丘尼びくにに狂いはする、そのうえ、このごろは、その比丘尼をうけだして、夜も昼も入り浸つてると三云うことだが、だいち、博奕は御法度だから、これが御頭の耳にでも入ると、追放になることは定まつてる、そうなれば、あなたは女房のことだから、夫に引きずられて路頭に迷わなくてはならない、そうになると、田宮家の御扶持切米も他人の手に執られることになる、わたしはあなたの御両親とは親しくしていたし、意見

もしいたいと思うが、わたしは与力で、支配同然だからすこし困る、どうか、あなたが意見をして、博奕と女狂いをよすようにしてください」

お岩は恥かしくもあれば悲しくもあつた。お岩は泣きながら恨みと愚痴を云つて帰つて来たが、家は閉まつたまま伊右衛門は帰つていなかつた。伊右衛門はその晩は喜兵衛の家において、隣の部屋から喜兵衛とお岩の話聞いていたのであつた。

朝になつてお岩は持仏堂の前に坐つてお題目を唱えていた。お岩の家は日蓮宗にちれんしゅうであつた。そこへ伊右

衛門が入って来た。

「昨夜ゆうべ帰ってみるといなかっただが、ぜんたいどこへ往つてたのだ、夫の留守に夜歩きするとはけしからん奴だ」

お岩は喜兵衛の家へ往つているのでやましいことがなかつた。そのうえ女狂いと博奕に家を外とがにしている夫が、すこし位の外出を咎めだてするのが酷く憎かつた。

「わたしは、伊藤喜兵衛殿からお使がまいりましたから、あがりました、わたしが、すこし留守したこ

とを、かれこれおっしやるあなたは、何をしていらつしやるのです、わたしのことをお疑いになるなら、伊藤喜兵衛殿にお聞きください」

「喜兵衛殿が呼んだにしたところで、家を空けて来いとは云わないだろう、何を痴ぼかなことを申す」

伊右衛門はお岩に飛びかかって撲なぐりつけた。お岩は泣き叫んだが、だれも止めに来る者もなかった。伊右衛門はお岩を散ざんに撲ふとんっておいて外へ出て往った。お岩は一室に入かみそりって蒲団ふとんを着て寝ていたが、口惜かみそりしくてたまらないから剃刀を執り出して自殺し

ようとした。しかし、考えてみると己じぶんが死んだ後で伊右衛門から乱心して死んだと云われるのはなおさら口惜しいので、剃刀を捨てるなり狂人きちがひのようになつて喜兵衛の家へ往つた。喜兵衛はお岩のそうして来るのを待ちかまえているところであつた。

「ぜんたい、その容さまはどうなされた」

「わたしは伊右衛門に、散ざんな目に逢わされました、わたしは、このことを御頭まで申し出ようと思
います」

お岩は身をふるわして泣いていた。

「それは伊右衛門殿が重々悪い、あなたの御立腹はもつともだが、夫の訴人を女房がしたでは、結局あなたが悪いことになって、おとりあげにはならない、これは考えなおさなければならぬが、伊右衛門の道楽は、とても止み^やそうにもないし、あなたもそうまでせられては、いつしよになつてもいられないだろう、わたしもあなたとは、あなたのお父様^{さん}お母様^{さん}からの親しい間だし、伊右衛門殿とても心安くしておるから、どちらをどうと^{ひいき}鼻^{ひいき}肩^{ひいき}することもできないが、このままでは、とても面白く往かないだらうか

ら、いつそ二人が別れるが宣いと思うが、伊右衛門殿は家代金を入れて、田宮の身代を買い執ってるから、そのまま出すことはできない、ここはあなたから縁を切つて、二三年奉公に出ておれば、あなたはまだ年も壮いし、わたしが引受けて、好い男を夫に持たしてあげる」

お岩は喜兵衛の詞ことばに云いくるめられて、伊右衛門の持ち出して往つた衣服きものを返してもらふことを条件にして別れることになった。伊右衛門は初めからそのつもりで質にも入れずに知人の家に隠してあつた

お岩の衣服を持って来て、うまうまとお岩を離縁したのであった。

お岩はそこで喜兵衛に口を利いてもらって、四谷

しおちよう

塩町二丁目にいる紙売の又兵衛と云うのを請人に

またべえ

さんばんちよう

頼んで、三番町の小身な御家人の家へ物縫い奉公に

ごけにん

住み込んだ。そうしてお岩を田宮家から出した喜兵衛は、早速お花を伊右衛門にやることにしたが、仲人なしではいけないので伊右衛門に云いつけて近藤六郎兵衛に仲人を頼ました。六郎兵衛は女房がお岩の鉄漿親かねおやになっっているうえに、平生喜兵衛を心よか

らず思っているのでことわった。伊右衛門はしかたなしに秋山長右衛門の許へ往って長右衛門に頼み、七月十八日が日が佳いと云うので、その晩にお花と内輪の婚礼をした。

その婚礼の席には秋山長右衛門夫妻、近藤六郎兵衛がいたが、酒宴さかもりになったところで、伊右衛門の朋輩いまいじんえもん今井仁右衛門、水谷庄右衛門みずたにしやうえもん、志津女久左衛門しづめきゆうざえもんの三人が押しかけて来た。そして、酒の座が乱れかけたところで、行灯あんどんの傍そばから一尺位の赤い蛇が出て来た。伊右衛門は驚いて火箸ひばしで庭へ刎はねおとしたが、いつ

の間にかまたあがつて来て行灯の傍を這うた。伊右衛門はまたそれを火箸に挟んで裏の藪へ持つて往つて捨てたが、朝ぼらけになつて皆が帰りかけたところで、天井からまた赤い蛇が落ちて来た。伊右衛門は何だかお岩の怨念おんねんのような気がして気もちが悪かった。伊右衛門はやけにその蛇の胴中をむずと掴んで裏の藪へ持つて往つて捨てた。

物縫い奉公に住み込んだお岩は、伊右衛門のことを思い出さないこともないが、それでも心は軽かつた。某日お岩が庖厨かっての庭にいと、煙草屋たばこやの茂助もすけと

云う刻み煙草を売る男が入って来た。この茂助はお岩の家へも商いに来ていたのでお岩とも親しかった。

「田宮のお嬢様でございますか、この辺あたりにいらつしやると聞いておりましたが、こちらさまでございますか、いかがでございます、左門殿町の方へも時どきいらつしやいますか」

「わたしは、もう、道楽者の夫とは、縁を切つて、こちらさまの御厄介になつておるから、往つたこともないが、さすがの比丘尼も、あの道楽者には困つ

ておりましたようよ」

「おや、お嬢様は、何も御存じないと見えますね、伊右衛門様は、伊藤喜兵衛様のお妾のお花さんを御妻室になされておりますよ」

「え、それはほんとかえ」

「ほんとでございますとも、それも人の噂うわさでは、喜兵衛様のお妾のお花と、伊右衛門様をいつしよにするために、喜兵衛様、長右衛門様、伊右衛門様の三人が同腹ぐるになつて、伊右衛門様に道楽者の真似まねをさせて、それでお嬢様をお出しになつたということだ

「ございます」

「そうか、そうであつたか、そう云えば、読めた、鬼、
外道」

お岩の眼はみるみる釣りあがつた。顔の皮が剥けて渋紙色をした眼の悪い髪の毛の縮れた醜い女の形相は夜叉やしやのようになった。茂助は驚いて逃げだした。お岩の炎の出ているような口からは、伊右衛門、喜兵衛、お花、長右衛門の名がきれぎれに出た。お岩の朋輩の婢達はお岩を宥なだめようとしたがお岩の耳には入らなかつた。伝六と云うその若侍がつかまえ

ようとするると、

「おのれも伊右衛門に加担するか」

と、云つてその若侍を投げ飛ばしたのちに、台所へ往つて台所用具を手あたり次第に投げ出してから狂い出た。御家人の家ではそのままにしておけないので、大勢で追っかけさしたがどこへ往つたのか姿を見失つてしまった。そして、辻つじの番人に聞いて歩いてみると、

「二五五六の女が髪をふり乱しながら、四谷御門の外へ走つて往くのを見た」

と、云うところがあつたので、またその方を探したがとうとう判らなかつた。

お岩が奉公先を狂い出て行方の判らなくなつたことは伊右衛門達の方へも聞えて来た。伊右衛門はそれを聞くとその当座はうす気味が悪かつたが、結局邪魔者がいなくなつたので安心した。

翌年の四月になつて女房のお花は女の小供を生んだ。それは喜兵衛の小供であるのは云うまでもない。伊右衛門の家はそれから平穩で、お花は続いて三人

の小供を生んだが、その小供の総領になつていゝお染そめと云うのが十四、次の男の子の権八郎ごんぱちろうと云うのが十三、三番目の鉄之助てつのすけと云うのが十一、四番目お菊きくと云うのが三つになつた時、それは七月の十八日の夜であつたが、伊右衛門初め一家の者が集まつて涼んでいゝると、縁の端さきにお岩いわのような女が姿をあらわして、

「伊右衛門、伊右衛門、伊右衛門」

と、三声続けて云いながら往つてしまつた。伊右衛門は邪氣を払うために、家の中で弾の入つてない

鉄砲を鳴らした。すると四番目の女の子がその音に驚いて引きつけ、医師いしやにかけたが癒なおらないで八月の十五日に歿くくなった。

それから伊右衛門の家には怪異が起つて、お染の許へ男が来るような気配があつたり、夜眼を覚して見ると女房の傍に男が寝ていて消えたりしているうちに、某日の黄昏たそがれ三番目の男の子が家の後へ往つてみると、前年歿くくなっている四番目の女の子がいて負つてくれと云つた。男の子は怖れて逃げて来たが、それから病氣になり、日蓮宗の僧侶に頼んで祈祷な

どもしてもらったけれども、とうとう癒らずにその年の九月十八日になつて歿くなつた。

伊右衛門はますます恐れて一雑司ヶ谷ぞうしがやの鬼子母神きしもじんなどへ参詣さんけいしたが、怪異はどうしても鎮ま

らないで女房が病氣になつたところへ、四月八日、

芝しばの増上寺ぞうじやうじの涅槃会ねはんえへ往つていた権八郎がその夜

霍乱かくらんのような病氣になつて翌日歿くなり続いて五月

二十七日になつて女房が歿くなつた。伊右衛門はお

染げんごえもんに源五右衛門と云うのを婿養子にしたところで、

その年の六月二十八日、不意に暴風雨が起つて雷が

鳴り、東の方の庇ひさしを風に吹きとられた。伊右衛門はしかたなしに屋根へあがって応急の修繕をしようとしたが、足を踏み外して腰骨を打って動けなくなつたうえに、耳の際を切つた疵きずが腐つて来て膿うみが出るので、それに鼠ねずみがついて初めは一二匹であつたものが、次第に多くなつて防ぐことができないので、長櫃ながびつの中へ入れておくうちに七月十一日になつて死んでしまった。

田宮の家では源五右衛門が家督を相続したが、そのうちにお染が病氣になつた。年は二十五であつた

と記録にある。そのお染が歿くなつてから源五右衛門は、家についている怪異が恐ろしいので、己じぶんの後へ養子をして別居しようと思つているうちに、邸やしきの内の樹木を無暗に斬りだした。源五右衛門は発狂したのであつた。それがために扶持を召し放されて田宮家は断絶した。

田宮家がこうして断絶する一方、伊藤喜兵衛の家では喜兵衛が隠居して養子に名跡を継がしてあつたが、その養子も隠居して新右衛門しんえもんと云うのに名跡を

継がしたところで、二代目の喜兵衛は吉原よしわらへ通うようになり、そのうちに遊び仲間が殺された罪にまきぞえになって、牢屋に入れられた末に打ち首になったので、家はとり潰されて新右衛門父子は追放になった。そして、一代目の喜兵衛は乳母の小供のかくすけ覚助と云う者の世話になって露命をつな繋いでいたが、暮の二十八日になって死んでしまった。

また、秋山長右衛門の家では、女のおむすめつねが食あたりのようになって歿くなり、続いて女房が歿くなった。その時田宮源五右衛門の家が断絶になった

が、その田宮の上り邸はすぐ隣であつたから、長右衛門に御預となつた。

そのうちに長右衛門は組頭になつた。御先手支配の浅野左兵衛は長右衛門を呼んで、田宮の後をとり立てるように命じたので、長右衛門は総領の庄兵衛しやうべえを跡目にした。すると己の跡目じぶんを相続するものがないので、御持筒組同心おもちづつぐみの次男で小三郎こさぶろうと云う十三になる少年を養子にした。そして、庄兵衛が御番入りをして三年目になつた時、庄兵衛は十人ばかりの朋輩といつしよに道を歩いていると、年のころ五十ば

かりに見える恐ろしい顔をした女乞食おんなこじきがいた。庄兵衛といっしょに歩いてきた近藤六郎兵衛はその乞食に眼を注つけて、

「かの女非人は、田宮又左衛門の女むすめに能く似ている」と云った。すると他の者は、

「お岩は、あれよりも背も低かったし、御面相も、あれよりよっぽど悪かった」

と云った。庄兵衛は小さい時から種々の事を聞かされているので気味悪く思ったが、それから三日目の夕方になって病気になった。長右衛門は驚いて庄

兵衛の家の跡目の心配をしていると、六日目の夕方から長右衛門自身が病気になって八日目に歿くなり、続いて庄兵衛が十日目になって歿くなったので田宮家は又断絶した。

小三郎は養父の二七日の日ふたなぬかになって法事をしたところ、翌朝六つ時分になって庖厨かに火を焼く者たがあつた。それは五十ばかりの女であつた。小三郎は不思議に思つて声をかけるとそのまま消えてしまつた。

その怪しい女の姿は翌朝また地爐いろりの傍に見えた。

その時小三郎はまだ眠っていたので小三郎の父の家から付けてある重左衛門じゅうざえもんと云う小男げなんが見つけた。小三郎は起きてその話を聞いて縁の下を検しらべたが、黒猫が一ついたばかりで別に不思議もなかった。しかし、怪異が気になるので大般若経だいはんによきょうなどを読んでもらったりしているうちに、これも病気になって歿くわくなったので秋山家も断絶した。そして、秋山と田宮の建物がとりこわしになったので、左門殿町の妖怪邸ばけものやしきと云って好事者ものずきが群集した。

底本…「怪奇・伝奇時代小説選集13 四谷怪談 他

8編」志村有弘編、春陽文庫、春陽堂書店

2000（平成12）年10月20日第1刷発行

入力…H i r o s h i ō


校正…門田裕志

2003年7月24日作成

青空文庫作成ファイル…

電子書籍作成…はつかぶつくす

電子書籍発行…2011年11月12日



電子書籍作成

はっかぶっくす

<http://hakkabooks.com/>